

# 山地民ラフから見た東南アジアの王と国家

片岡 樹

かたおか たつき / 京都大学、AA 研共同研究員

山地民は歴史をもたない民族だとしばしば言われるが、それは我々の偏見のせいなのかもしれない。我々が見落としがちな山地民の国家、王、およびそれらをめぐる土着の概念について、ラフの事例から考える。

## はじめに

ラフというのは中国雲南省西南を原郷とし、ミャンマー・シャン州やタイ国北部山地などに居住するチベット・ビルマ語系の山地民である。山地民のあいだでは、自分たちがかつて国や王をもっていたという伝承がしばしば語られる。この点に関しラフも例外ではない。ラフの神話伝説を聞いていると、ラフはもともとは自分たちの国や王をもっていたが、それが漢民族やタイ系民族の奸計によりだまし取られてしまった、というモチーフが頻りに登場する。そうしたかつての亡国の結果として、ラフは征服者たちに追われ、現在のように雲南西南からミャンマー、タイへと離散する運命になったという物語が続くわけである。この種の説明は単なる負け惜しみのようにも聞こえる。しかしそのすべてが作り話だと断

定するのも極論である。ではラフにとって国や王とはどのようなものだったのか。

## 国と王を失った話

ラフの人々が語るかつての国や王については、明らかに実在が疑われるものも多く認められる。たとえば、天地創造にあたり至高神グジャがラフを全世界の王に任じたが、ラフの王が誤ってシャン（タイ系民族のひとつ）の娘の胸に触れてしまい、その賠償として神から与えられた王の印章を失ってしまったとか、あるいは、ラフが「北京南京」の支配者で全世界に号令をかけていたが漢人の口琴の音色に騙されたラフの女たちが、言われるままにラフの男たちが使う弩のひきがねを渡してしまい、後日攻め込んできた漢人たちに敗れて「北京南京」の支配者の地位から転落したとかの物語などがそれにあたる。これらはどう考えても荒唐無稽な、中原の繁栄をねたんでひねり出した屁理屈にしか聞こえないものであるが、ラフにとっての国や王を理解するには、ほかの事例にも目を向ける必要がある。その前にまず、そもそも国や王という言葉がラフにとってどのような意味をもつのかを見てみたい。

## ラフ語の「国」と「王」

ラフの人々がかつての自分たちの国や王について語る時に使われる言葉がムミ（国の意）とジョモ（王の意）である。ただしここで急いでつけ加えなければならないのは、これが必ずしも近代国際関係という主権国家やそこでの世襲君主（ないし国家元首）のみを意味しているわけではないという点である。

この地域の前近代国際関係を確認しておく、国家や王というのは規模の大小に応じて階層的に整序されているのが常であった。大国にはそれに服属する国や王があり、さらにそれらの国や王に服属するより小さな国や王があり、という具合である。

実際にムミやジョモという言葉が意味する範囲はいわゆる国家や王よりも少し広い。ムミは現在の独立主権国家だけではなく、上級権力に服属していた中小規模の地方国や、今でいえば国家の下位に属する地方行政単位をも含意する。ジョモも同様に、国家元首のみならず服属国の国主や地方政府の長などを

東主仏堂（雲南省瀾滄県）。19世紀に雲南ラフ山地で栄えた「五仏」の一角を構成し、「仏ジョモ」の拠点として知られる。19世紀末の清朝の直接統治導入に反対するラフ仏教徒の反乱に際してはその中心となり、反乱の鎮圧に伴って仏堂の勢力もまた大きな打撃を受けた。



瀾滄県南段郷のラフの村の中心に立つ杭である。これは漢語で寨心といい、村びとはここに集まり、村の神を祭る行事を行う。寨心はラフ独特なものではなく、盆地のタイ系村落にもある。



ラフの人々が宗教儀式に使用する魚の模型である。瀾滄県の南段郷には漢語で祭堂と呼ばれる宗教施設があり、後ろに見える「鳥居」のような門は祭堂とセットになっている。



意味しうる。つまりラフのいう国や王というのは、この地の国際関係の歴史に対応して非常に柔軟な幅をもっているのである。

### 18世紀以降の雲南西南山地

ではそうした国際関係にラフはどのように関わってきたのだろうか。雲南西南部では伝統的に、タイ系の盆地国家の国主が自ら王を名乗り、清朝やビルマ諸王朝に朝貢を行う一方、盆地を取り巻く山地に対して名目的な宗主権を有していたが、この民族ごとに階層化された国際関係は、18世紀ごろからタイ系盆地国家の国力低下により安定を失い始める。その間隙をぬって勃興したのが山地のラフ勢力である。雲南西南ラフ山地では18世紀より、漢人僧がもちこんだ大乘仏教が広まっている。僧侶たちはラフのあいだで仏の化身ならびに至高神グシャの化身とみなされ、そのカリスマ的なリーダーシップのもとで人々を組織化していった。その結果として、雲南省のメコン川西岸地域では18世紀末以降、仏房を拠点として僧侶に率いられたラフたちが自立化し始める。この仏房連合政権は「五仏」と呼ばれ、そうしたラフの自立化傾向は19世紀後半まで続く。

1880年代にビルマ全土が英領化すると、英領ビルマとの国境の明確化を迫られた清朝政府はラフ地区の討伐を行い、国境画定交渉に先立って駆け込み的に直接統治のアライ作りを始める。こうして近代的な国境線が引き直された国際関係の中に、もはやラフの居場所はなかった。この一連の措置を不服とするラフの人たちは、至高神グシャの再臨を唱える千年王国的な指導者のもとで幾度も清朝に対し蜂起を試みてきたが、それが鎮圧されるたびに不満分子はミャンマー側、さらにはタイ側へと安住の地を求めて移住していった。そしてこの至高神グシャへの待望は、移住先の東南アジア各国にも持ち込まれることになる。

### ラフの王たち

18世紀末以降に雲南西南部各地に誕生したラフの半独立勢力は、その多くがラフ語でジョモと呼ばれている。18世紀末の雲南で略奪団を率いて清朝に抵抗したチャナは、ラフの自立化のさきがけをなす人物であり、彼は



現在、雲南西南の山地には棚田が多く見られる。ここ、瀾滄県の上允鎮は、18世紀末以降、ラフ政権の中心といえる仏房が置かれた地域であるが、当時は焼畑農耕を営んでいたため、風景は異なっていたと思われる。

カメラの前で恥ずかしそうな顔をする瀾滄県南段郷のラフの女の子。



現在でも歌謡の中で王すなわちジョモとして言及されている。またさきに述べた「五仏」体制においては、仏(=至高神グシャ)の化身としての僧が「仏ジョモ(フジョモ)」と呼ばれていた。また19世紀後半の双江を拠点に、清朝の干渉を拒否し続けたラフの最大勢力の首領は「若末」と呼ばれるがこれもジョモの当て字である。同時期に清朝は、この若末を牽制すべく周辺の小領主に下級土司の称号を付与している。そうした下級土司もまた、自ら王やジョモを称していた。このように、ラフの人々からみれば、近年まで自分たちの山地を統治する王(ジョモ)がいたというのはまぎれもなく事実なのである。それどころか、20世紀になって中国、ビルマ、タイ各地で続発するラフの千年王国運動に際しては、至高神グシャの化身を名乗る指導者たちがジョモと呼ばれている。ラフの王は、ラフ山地が近代国家に分割され終わった後も、今に至るまで断続的に王を輩出し続けている。山地民が王や国をもたない民族だと決めつけるのは早計である。ただ単に、それらが我々の視野に入りにくいだけなのかもしれないということを、ラフの事例は教えてくれる。

### おわりに

なぜ山地の王は我々の視野に入りにくいのか。その一つの理由は、我々の思考があまりにも近代主権国家のイメージに毒されてしまっていることである。そのことが、複雑な朝貢関係のもとで階層的に整序された国際関係や、その末端に位置していたミニ国家の存在を不可視にしてしまっている。もう一つの理由は、我々の思考が大国中心の歴史語りにならされすぎていることである。ラフの山地にはジョモすなわち王が存在し続けてきたわけだが、なぜそれが我々の目に見えないかというと、史書がそれを邪魔するからである。雲南の例でいえば、中国政府の統治に服していないという事実だけをもって「反乱」と決めつける記述スタイルが、過去の清朝期から現在の共産党政権期まで一貫している。ラフにかぎらず、この地域に存在したかもしれない国家や王、あるいはそれを支えてきた当事者たちの思考を理解するには、近代国家史観や反乱史観といった色眼鏡をいったん捨て、複眼的な視点でこの地域の国際関係を再考する必要がありそうである。

山に登る牛のキャラバン隊である。木製の鞍に米を積んだ袋二つを牛の背中に載せる。昔から、険しい山が多い雲南西南では、物資を運搬するのに、牛、ロバと馬が使役されてきたが、瀾滄県では自動車道がないところではその姿が現在も見られる。